田尻歴史館（大阪府泉南郡田尻町）

大門一夫

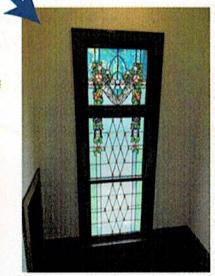
昨年7月、田尻歴史館は、老朽化と耐震補強工事等を終え、6年ぶりにリニューアルオープン。

それを機に、田尻町と管理会社の依頼を受け、田尻歴史館「新旧ステンドグラスコラボ展」（10.21～23日）を開催いたしました。田尻町と近隣地区の方々が3日間で250名来場され、盛況のうち終了することができ、大変感慨深いものとなりました。

田尻歴史館（愛称 愛ランドハウス）は明治から大正時代を通じて関西繊維業界の中枢であった谷口房蔵（元大阪合同紡績株式会社社長）の別邸として大正12年に建築され、平成8年に国登録有形文化財、平成17年大阪府指定有形文化財に指定されています。

レンガ造りの2階建て洋館の横には日常生活のための和風住宅が設けられています。ヨーロッパスタイルの洋館は至るところに草花をモチーフとしたステンドグラスが入れられていますが、その中でも繊維業界の中枢にふさわしく「綿花」をモチーフにしたステンドグラスも。

2階踊り場のステンドグラスが最も大きく印象的で、アメリカ製の乳濁した緑色系のマーブルガラスが用いられ大変美しい光の空間を演出しています。



モチーフは草花！

ステンドグラスの作者は、明治末期からステンドグラス制作者として活躍した**木内真太郎**。（宇野澤組ステンドグラス製作所、後の日本最古のステンドグラス工房として知られる玲光社の設立者。）

JSGaA活動報告

2022 9.12 ラインミーティング
12.12 ラインミーティング
2023 2.27 ラインミーティング
4.10 通常総会（ラインミーティング）
5.12～5.18
第11回日本ステンドグラス作家協会展
2023東京〝EMOTION Ⅺ 感動〟
（場所 東京都美術館ギャラリーC）
6.22 ラインミーティング①
9.19 ラインミーティング②

今後の活動予定

2024 5.12～5.18
第12回日本ステンドグラス作家協会展
2024東京〝EMOTION Ⅻ 感動〟
9.7（土）～9.29（日）
日本ステンドグラス作家協会企画展in香川
（場所 香川県坂出かまどホール） （仮題）

＊公募作品募集のお知らせ！

来年度東京展の一般公募作品の募集を致します！詳細については、協会のHP（ニュース）をご覧ください。たくさんのご応募、おまちいたしております！！！

Renewal

JSGaAのHPリニューアルのお知らせ！

HP：https://jsgaa.jp e-mail：jsgaa@jsgaa.jp

発行日 2023年10月
発行者 日本ステンドグラス作家協会（JSGaA）
事務局 〒187-0002
東京都小平市花小金井7-26-10
船越文恵（アトリエF）jsgaa@jsgaa.jp
編集者 〒737-0124
広島県呉市広中新開2-14-19
花田良子（atelier legare）
〒769-1405
香川県三豊市仁尾町仁尾庚564-3
藤田京子（ステンドグラス工房 Sun Shine）

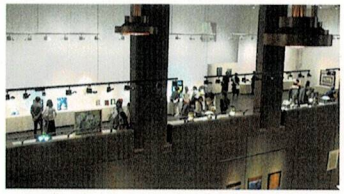
日本ステンドグラス作家協会
Japan Stained Glass Artist's Association

日本ステンドグラス 作家協会
JSGaA
会報誌vol.30
2023年10月

第 11 回日本ステンドグラス作家協会展

2023 東京 "EMOTION　XI　感動"

5.12～5.18



本年度も、コロナ感染予防対策には十分留意しながらの開催となりましたが、入場者数 3,531 名と昨年以上に多くの皆様にご覧頂き、貴重なご感想・ご意見を頂くことができ、実り多い東京展となりました！

会場風景

最優秀公募賞「三日月の森を泳ぐ」

～受賞者　川﨑恵さん～

今回の作品は公募展に応募するため３年前に制作しました。作品展の中止、繰越を経て今回展示の機会を得、さらに賞まで頂き感慨深く大変光栄に思います。

アクアリウムをぼんやり眺めていた時、なんだか森の中を泳いでるみたいだなぁ、というところから着想を得て想像を膨らませていきました。寝静まった森と深い海の青、照らす光は太陽なのか月なのか、似て非なるもの、見えるようで見えない曖昧な世界を表現しました。

普段からストリンガーなどを使用してピンセットで細かい作業をするのが好きで、一部の珊瑚や魚にはフュージングで表情をつけています。ガラスを浮かせて立体感と動きを出すなどしていますが、あとは至ってシンプルでガラス自体の美しさの組み合わせによるものです。

最後に、受賞に感謝しつつも驕らず、人と比べず、作ることの楽しさを忘れないように日々精進していきたいと思います。

ステンドグラス散歩

『旧石川組製糸西洋館』　鈴木　孝

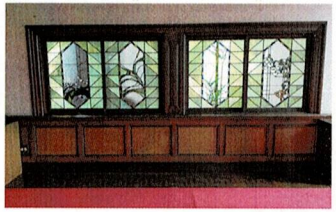
埼玉県越生からの帰り道、入間市の「旧石川組製糸西洋館」に立ち寄りました。
（本館は、年に数回一般公開されている。）

西洋館は 1921（大正10）年頃、石川組製糸の創業者石川幾太郎（いくたろう）が建てた洋風木造建築で、当時アメリカから生糸を買い付けに来る商人を迎える為の迎賓館として建てられました。

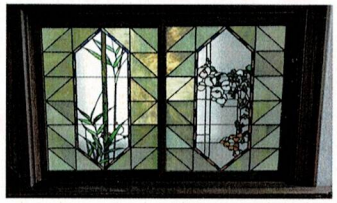
本館２階の大広間には、４枚のステンドグラスがはめ込まれています。外光が十分に差し込むので、ガラスの持ち味がしっかりと出ています。（一枚の大きさは、縦 86.5 ㎝　横 69 ㎝）

このステンドグラスは、中国の東洋画の画材とされる「四君子（蘭・竹・菊・梅）」を題材としたものです。

国内に現存する四君子のステンドグラスは僅か＊３例であり、そのうちの一つとしてとても貴重なものです。



デザインは三崎彌三郎、制作は別府ステインド硝子と推定されます。（三崎の代表作には、国立科学博物館中央階段のグラスモザイク、国会議事堂議員階段ステンドグラスなどがあります。）



右端は菊ではなく、当地方の特産狭山茶の「茶の花と実」をモチーフにしたものにも見えます。

茶の花

＊四君子ステンドグラス３例とは？

- 旧石川組製糸西洋館（埼玉県入間市）三崎彌三郎作　公開日あり
- 岩本邸（鹿児島市）円窓二枚組　小川三知作　非公開
- 旧松本丞治邸（鎌倉市）　森勇三作（宇野澤製作所）　非公開

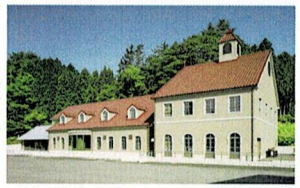
発見！パブリックアート

「昭和 60 年春 ふる里・日本の華」平山郁夫作（1985 年上野駅中央改札外コンコース）

世界でも珍しいウランガラス美術館　花田良子

『妖精の森ガラス美術館』

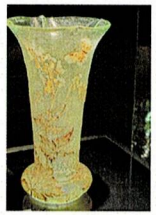
（岡山県苫田郡鏡野町　2006 年～）



1955 年岡山県と鳥取県の県境の鏡野町の人形峠でウランの鉱床が発見されました。平和的文化的な活用を模索する中で、戦前世界ではウランガラスが食器や芸術品として美しいガラスの輝きを放っていたことに着目し、ガラスの着色剤として微量（0.1 ～1％）のウランを用い、その名も「妖精の森ガラス」と命名。

ガラスの素材着色には、主に金属元素が用いられますが、ウランガラスの原料は、ガラスの一般的な成分である二酸化ケイ素とアルカリ金属の酸化物などの他に色をつけるためにウラン化合物を 0.1 ～ 1％程度加えて作られます。

ウランがガラスの着色剤として使われ始めたのは、1830年代。当時ガラス製品の製造が盛んだったチェコのボヘミア地方のガラス工芸家フランツ・リーデルが作り出したとされています。



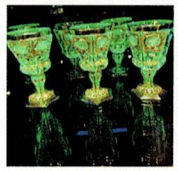
ガレ「花蝶文花器」

エミール・ガレやルネ・ラリックも、作品の素材として使用しています。日本でも、大正から昭和にかけて大量に製造されていますが、第二次世界大戦の激化とともに、ウランは軍事利用の為一般的には使用が禁止され、ウランガラスの製造は途絶えてしまい、世に出ることはなかったという歴史があります。

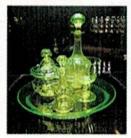
人形峠、ウラン鉱床…遠ーい昔学校の授業で習ったな…思いながら、そこから、何十年を経てオリジナルの「妖精の森ガラス」が誕生し、「美術館」が存在している。作家さんによる作品の企画展、館長さんのウランガラスについて語る熱意にも感動。常設展示室には、アールヌーボーの巨匠エミール・ガレの花器を始め、製造年の明確なウランガラスとしては世界最古といわれる「ミルクピッチャー」、「ロシア皇帝のゴブレット」（1800 年代）など約 80 点が並びます。ウランガラスは、紫外線が当たると美しい緑色の蛍光を放つ、その特徴が存分に発揮されるように光、ブラックライトの当て方も工夫され、展示室はまさに幻想的で神秘的な空間でした。“妖精の森”（fairywood）ガラスと命名された、そのことに妙に納得した瞬間でした。

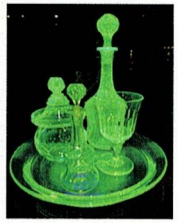
館内撮影 OK！

自然光



「ロシア皇帝のゴブレット」





「テーブルセット」

＊ウランと聞くと、放射能と結び付けて考えがちですが、ウランガラスに使用されるウランは、ごく微量で、人間の体内でカリウムが出している放射線量にほぼ等しく、また、ウランガラスからウランの成分が溶け出すことはないため、日常、飲食に用いても問題はありません。　～日本ウランガラス同好会資料抜粋～